

総合計画市民検討協議会 第4回報告書（健康・福祉部会）

記録者	菅原 香理	場所	市役所北庁舎第1～3会議室	
開催日時	平成24年3月10日（土） 午前9時30分～正午			
出席者 （10名）	菅野 修逸	木田 幹郎	桑原 朋美	齊藤 真弓
	鈴木 麻理絵	横手 喜美子		
	川村 昂史	木佐貫 博之	菅原 香理	中村 充彦
傍聴者	2名（ ）			

基本目標	I 安心でいきいきと暮らせるまちづくり（健康・福祉）
基本施策	9 地域福祉活動の支援

めざすまちの姿（平成33年のまちの姿）

○誰もが不自由を感じることなく、快適に暮らしています。

- ・「高齢者や障害者が暮らしやすいまち」と限定するのではなく、「市民みんなが暮らしやすいまち」になっている。
- ・地域、世代、新旧住民等における格差がなくなっている（格差のバリアフリー）
- ・ユニバーサルデザインが普及し、安全・安心の施設整備が実現している。
- ・自転車専用道路が完備され、歩行者（特に車いす、ベビーカー、子ども連れの人）が歩道を安全に通行できるようになっている。
- ・医療難民、情報難民がいなくなっている。

○多くの方がボランティア活動や地域活動に取り組んでいます。

- ・積極的にボランティア活動やNPO活動に取り組んでいる。
- ・ボランティアや地域活動に参加することが「特別なこと」ではなくなっている（ごく普通にボランティア等に参加している）

主な課題

○既存施設や道路等のバリアフリー化を完成させることが課題。

- ・とくに公共施設のバリアフリー化は喫緊の課題である。

○ユニバーサルデザインの普及が課題。

- ・バリアフリーデザインの考え方は広く知られているが、ユニバーサルデザインについては、定義どころか言葉そのものを知らない人も大勢いる。

○ボランティア活動や地域活動への関心を高めることが課題。

- ・世論調査の結果（以前の会議資料）をみると、「地域福祉活動の支援」の項目は、満足度・重要度ともに低く、市民の関心がないことがわかる。関心を高めていくための対策が必要。
- ・幼少時から福祉教育（ボランティア教育）を行い「互いに助け合う心」や「思いやるやさしさ」を育てることが必要。また、積極的にボランティアに参加するような意識づけを行う必要がある。

○「ボランティア」という言葉に縛られない社会の実現が課題。

- ・ボランティアという言葉の見直しが必要ではないか。「福祉活動に参加すること＝ボランティア」ではない。参加したい気持ちはボランティア精神でも、実際に福祉に興味や関心のある人は、自宅介護をしている人や福祉の仕事をしている人ではないのか。
- ・ボランティア精神とは、福祉の根本の「思いやり」の精神のことなので、ボランティアという言葉に縛られすぎてはいけない。

○平等な情報提供の実現が課題。

- ・現状では、意識して情報を得ようとしないと、知ることができない。市民にとって身近なスーパー、公園などの大勢が集まる場所を活用したネットワークシステム（情報提供・発信・収集）を構築し、情報難民をなくす必要がある。

役割分担の考え方

【市民の役割】将来像の実現に向けて自分たち市民ができること、取り組むべきこと

○ボランティアに対する意識を変える。

- ・ひとりひとりの気持ち、意識を変えることが必要不可欠。
- ・ボランティア精神とは、ちょっとした思いやりの心である。ボランティアを特別なものと捉えず、できることから気軽に取り組む意識を持つことが大切。また、ボランティア活動をやらない人（できない人）がいても、白い眼を向けるようなことはあってはならない。
- ・若いころからのボランティア意識の形成が必要だが、学校での福祉教育だけでなく、家庭においてもボランティア教育を実施する必要がある。

○積極的にボランティア活動等に参加する。

- ・ボランティアの行事等に参加しなくても、身近で困っている人に手助けすることから始めればよい。たとえば車いすに乗っている人や視覚障害の人（白杖をもっている人）が困っている様子を見かけたら声かけするのも、立派なボランティアである。

○近所づきあいを起点にしたボランティア活動を行う。

- ・良い意味での「おせっかい」を心がける（見守り、声かけなど）
- ・日頃から気軽に声をかけ合える関係を築くようにする。
- ・民生委員とは別に「見守り隊」「聞き込み隊」のような活動を行う。アクティブシニアの活用にもつながり、町単位の組織にすれば、こまやかな対応ができる。

【行政の役割】自分たちの取り組みを実現するために行政に支援してもらいたいこと、行政が行うべきこと

○バリアフリー化の促進およびユニバーサルデザインを普及させる。

- ・既存施設等のバリアフリー化を進めるとともに、バリアフリーマップの種類や内容を充実させてほしい。また、高齢者には「バリアフリー」「バリアフリーマップ」といわれてもピンとこない人もいるので、そういった人にもわかりやすい啓発をしてほしい。
- ・ユニバーサルデザインとは何かの普及活動を行ってほしい。

○ボランティアやNPOに関する情報提供を強化する。

- ・「福祉広報」だけでなく「広報ふちゅう」にも多くの情報を掲載してほしい。

○幼少時からの福祉教育（ボランティア教育）を充実させる。

- ・福祉やボランティアについて、小さい頃から興味、関心をもたせるような教育をしてほしい。
- ・現在の福祉教育とは一体何か？「優先」と書いていないところでは優先しなくていいと思っ
ているような子どもを見かけることもあるので、福祉教育とはなにかを見直してほしい。

○地域ごとに住民が交流できる場所を整備する。

- ・孤立する老人をサポートするのは、遠くの家族より近所の人である。
- ・自治会（町内会）は重要な地域交流の場となり得るが、世代間の格差や新旧住民の格差など
があるという問題がある。市の協力で格差を解消してほしい。
- ・ケヤキ並木に石段のベンチを作ったようだが、例えば足湯を作るなどしたら更に地域住民の
憩いの場となるのではないか。
- ・福祉関係のイベントを開催する時、地域ごとにわけることで、地域の中での支えあいの気持
ちを育ててほしい。

その他 提案事項

○福祉サービス全般について

市民からの申請主義ではなく、行政からの告知・提供主義にすることがサービス向上に欠か
せないなので、ぜひとも改善してほしい。

○災害時の対策について

- ・道路のバリアフリー、避難標識の整備、アナウンスを行う際の電源の確保など、現状を良く
点検して整備しておいてほしい。
- ・聴覚障害の方はアナウンスが聞こえない。情報が平等に行き渡るよう、きちんと対策してお
いてほしい。

事務局への連絡事項

- ・本日検討した基本施策は「地域福祉活動の支援」と「高齢者サービスの
充実」の2本。
- ・次回は、「低所得者の自立支援」と「障害者サービスの充実」につい
て検討する予定。

総合計画市民検討協議会 第4回報告書（健康・福祉部会）

記録者	菅原 香理	場所	市役所北庁舎第1～3会議室	
開催日時	平成24年3月10日（土） 午前9時30分～正午			
出席者 （10名）	菅野 修逸	木田 幹郎	桑原 朋美	齊藤 真弓
	鈴木 麻理絵	横手 喜美子		
	川村 昂史	木佐貫 博之	菅原 香理	中村 充彦
傍聴者	2名（ ）			

基本目標	I 安心でいきいきと暮らせるまちづくり（健康・福祉）
基本施策	3 高齢者サービスの充実

めざすまちの姿（平成33年のまちの姿）

○高齢者が健康でいきいき暮らしています。

- ・健康と言っても、からだだけでなく「こころ」の健康も重要。心身ともに病気をせず、生きがいを持って生活できている。
- ・必要な時に必要なサービスを受け、安心して暮らしている。
- ・年齢を意識しない日常を送っている。

○市民みんなが高齢者を尊敬し大切にすることを意識を持ち、高齢者の尊厳が守られています。

- ・みんなが高齢者を大切することで、高齢者が「自分は必要とされているんだ」と思うことができ、いきいきと暮らすことに繋がる。

主な課題

○高齢者の孤立を防ぐことが課題。

- ・包括支援センター、見守りネットワーク、民生委員などを活用し、孤立する高齢者をなくす必要がある。
- ・高齢者人口が増えていく中で、ひとり暮らしの高齢者や高齢者のみの世帯をどう支援するかが課題。

○世代を超えた交流を図ることが課題。

- ・核家族化が進み、高齢者が子どもや孫の年代と接する機会が減っている。
- ・小さい時から高齢者と交流することで、自然と高齢者を敬う気持ちを身に付けることができ、高齢者の過ごしやすい社会が実現する。

○さまざまな形の生きがいの創出が課題。

- ・「老人クラブ」等の団体活動だけが高齢者の生きがいではなく、ひとりで心静かに安心してゆったりした生活を営む生きがいもある。そのための充実策が課題。

○高齢者の金銭的負担の軽減が課題。

- ・年金生活を送る高齢者にとっては、医療費やサービス利用料などの負担が大きく、必要なサービス等が受けられないことがある。今以上の金銭的負担の軽減が課題。

役割分担の考え方

【市民の役割】将来像の実現に向けて自分たち市民ができること、取り組むべきこと

○ 良い意味での「おせっかい」をする。

- ・地域に目を向け、近所づきあいを大切にする。近所づきあいを通して見守りや声かけを行い、孤立する高齢者をなくすようにする。
- ・高齢者と触れ合う機会があれば、積極的に参加する。

○ 高齢者自身も「生きがいを持って楽しく生きよう」という意識を持つ。

- ・「仕事」をすることで高齢者が充実した生活することに繋がる。元気な人は、シルバー人材センターなどを活用し生産的活動をすることで、生きがいを得られる。
- ・3人の友人（年上、同年代、年下）を作るという意識で、さまざまな世代から刺激を受けながら、いきいき生活しようと自らも努力をする。

【行政の役割】自分たちの取り組みを実現するために行政に支援してもらいたいこと、行政が行うべきこと

○ サービスやイベントに関する情報提供を強化する。

- ・せっかく良いサービスやイベントを実施しても、知られていなくて活用してもらえないのでは意味がないので、PRを強化する。
- ・府中の高齢者サービスは充実していると思うが、若い世代には知られていないように感じる。若い世代に対しても高齢者サービスを周知しておくべきである。

○ 高齢者に対する支援策やイベントを充実させる。

- ・今以上に『予防』（介護予防、認知症予防）に力を入れてほしい。
- ・高齢者の目標としてもらうため、アクティブシニアの理想像を打ち出してほしい
- ・レクリエーション大会などの機会を増やしてほしい。70歳以上などと参加者を限定するのではなく、高齢者を中心としつつも若い世代と交流できるイベントであるほうがいい。
- ・高齢の方が「最近の若い人は…」というように若者世代に悪い印象を持っていないとも限らないので、垣根を取り払うような効果のある事業を実施してほしい。
- ・民間の力をうまく活用した事業展開をしてほしい。
- ・身体的なサポートだけでなく、精神的活動へのサポートをしてほしい。

○ 介護施設を充実させる。

- ・特別養護施設を充実させてほしい（質、数ともに）
- ・「安立園」のような幼老複合施設を増やし、異世代交流の推進をはかってほしい。

○ 「ひとりで生きる素晴らしさ」をPRする。

- ・高齢者はみんながみんな団体でいないと何もできないわけではない。ひとりで何かすることも良いことだし、個人が自分を見つめることで生きがいを感じることもあるはず。しかし、現在の計画や施策を見ていると、高齢者は集まっていないといけないかのように感じられるので、必ずしもそうではないことを念頭に施策をすすめてほしい。
- ・「ひとりで生きることの素晴らしさ」という講演会を行うなど、高齢者がそれぞれ生き方を選択できるよう、選択肢を示してほしい。

その他 提案事項

(指標のアイデア、事業のアイデアなどの提案など。)

事務局への連絡事項

- ・本日検討した基本施策は「地域福祉活動の支援」と「高齢者サービスの充実」の2本。
- ・次回は、「低所得者の自立支援」と「障害者サービスの充実」について検討する予定。